

海を詠う

岩井圭也

揺りかご
揺籃はごんごん音を立ててゐる 真白いしぶきがまひあがり 霧の
やうに向ふへ引いてゆく 私は胸の羽毛を掻きむしり その上を漂
ふ 眠れるものからの帰りをまつ 遠くの音楽をきく 明るい陸は
肩を開いたやうだ 私は叫ぼうとし 訴へようとし 波はあとから
消してしまふ

私は海に捨てられた

(左川ちか「海の捨子」)

第一回

ふうん、と耳元で羽音が鳴った。

この羽音が現実のものでないことを、伊藤いとはよく知っている。苛立ちが募ったとき、決まって聞こえる耳鳴りだった。いつから聞いているのか正確なところは覚えていない。小樽おたるの高商こうしょうに通っている時分、すでに聞こえていたのはたしかだ。

銀座の一角にあるカフェは午前中とあって空すいている。向かいの席に座る百田ももたは、三月に入ってやっと温ぬくなってきた、とか、餌えきをやった野良犬が懐いて困ってる、とか、どうでもいい世間話ばかりしている。伊藤は気まずさをごまかすためコーヒを口に運んだ。

百田の用件はだいたいわかっていた。少なくとも、一月に亡くなった左川さがわちかに関する事柄であるのは間違まちがいなかった。大方、彼女からあずかった遺稿の整理ではないかと踏ふんでいた。

「ほんで、頼みたいのはちかちゃんのことなんやけどね」

ようやく本題を切り出したころには、席について三十分も経っていた。百田は口髭くちひげをしごきながら、本人の意思なんよ、と言いつつ訳するように言う。

「ご家族が言うには、ちかちゃんが亡くなる前に言うてたらしいね

ん。詩集の編纂へんさんは伊藤くんをお願いしたい、と」

「そう、ですか」

反応が一拍遅れた。

「ほんまはぼくがやるつもりやったけど、本人の希望とあれば叶えへんわけにはいかん。生前に出せんかったんはぼくの責任やしね。

出版の手筈てはずはこっちでつけるから、伊藤くんには収録する作品を選んでほしい」

伊藤は沈黙した。

亡くなる直前の彼女とのかかわりを考えれば、ほかにもっと適任の者がいるように思えた。一方で、ちかが自分を指名した理由もうっすらとわかってはいた。ちかは試しているのだ。伊藤が、詩人左川ちかの代表作としてなにを選ぶのか。

——伊藤さんに読んでほしくって。

わだほりまち和田堀町のアパートで聞いたちかの声が、耳によみがえった。

「忙しいんは知ってるけど、ちかちゃんの遺言やから」

「……わかりました」

はな端から断るつもりはなかった。ただ、ふたつ返事で請け合える仕事でもなかった。妻が知れば、まず間違まちがいなく機嫌をそこねるだろう、という危惧きぐもある。それでも諾だくと答えるほかに選択肢せんたくしはなかった。返答を聞いた百田は、「そうか」とあからさまに安堵あんどを滲にじませた。

手提げ鞆からいそいそと書類を取り出す。

「ちかちゃんの作品は、こっちでざっと一覧にはしてるんや。このなかから選んでくれたらええんちゃうかな」

手渡された書面には、ちかの作品の題と初出が書き連ねられていた。ペンで綴られた字の几帳面さは、百田のものではなかった。

伊藤の視線は、〈海の捨子〉という題で止まった。初出は昭和十年の『詩法』。

この詩を最初に読んだときは記憶している。読了するなり、伊藤は雑誌を壁に投げつけた。真夏のことだった。背中にぐっしょりと汗をかいた伊藤は、荒い息を吐きながら雑誌を拾い、本棚に差した。以後、その雑誌は一度も開いていない。

「これは載せよう、と決めてる作品でもあるんか？」

書面を凝視する伊藤を見て、百田は上目遣いに問いかけた。

「いえ。いま聞いたばかりなので」

「そらそうやな。あほなこと訊いたわ。まあでも、世評のええ作品はだいたい載せたほうがええんちゃうかな。もちろん、伊藤くんにかせるけど」

「たとえば？」

「〈海の捨子〉とか」

指先にじわりと汗が滲む。

たしかに〈海の捨子〉は、伊藤の周囲でもとりわけ評価が高かった。くわえて、ちか本人もこの詩には執着していた形跡がある。同じ月に、ほとんど同じ内容の〈海の天使〉を別の雑誌に発表したのだ。伊藤が依頼を受けたことで肩の荷が下りたのか、百田の口は軽くなっていた。

「ぼくは、〈海の天使〉よりも〈海の捨子〉のほうがええと思うね。少しばかり不格好かもしれないけど、改行のない〈捨子〉のほうが彼女独特の面白さが出る。このへんは仲間内でも意見がわかれると思うけど」

伊藤もほぼ同じ意見だったが、愛想笑いだけを返した。「考えてみます」

そう言いつつ、伊藤のなかですでに結論は出ていた。

——〈海の捨子〉は載せない。

ちかは世を去るのが早すぎた。ただ、ちかが逝いったという報を聞いたあるとき、伊藤はかすかに、本当にかすかに安堵を覚えた。あ那时的安堵は、いまもしつこく心の奥底にこびりついている。

伊藤は再びコーヒーを口にふくんだ。黒くつややかな液体は、なんの味もしなかった。

第一章 緑の焰 ほのお

わたしは、わたしのからだのなかで、小指がいちばん気に入らない。
い。

他にもいやな箇所はある。面長の輪郭も、細い目も、色の濃い肌も、ひらべったい胸も、取り替えられたらどんなにいいだろう、と思う。でもいちばんは小指だ。他の指よりうんと短い、ツクシみたいなお小指。

小指が短い女は、運命が短い。誰かに言われたわけでもないのに、そう確信するようになったのはいつだったろう。本別から余市に移り住んだとき？ おおかわ 大川の小学校に通うようになったとき？ それとも、高女への汽車通学をはじめたとき？ はっきりしたことは覚えていないけれど、たぶん、伊藤さんと知り合った前後だったと思う。

「伊藤整さん」

わたしの声は束の間宙に浮かんで、じきに余市湾のさざ波にかき消された。

名前を口にするたび、歯の根がぐらぐらするような甘やかさが広がる。その効能は、何度呼んでも衰えることがない。だからといって、連呼するようにはしたくない真似はしない。大切な名前は、大切に

扱わないといけない。

昼前の海は、穏やかだった。

薄曇りの空の下で、藍色の水がたゆたっている。時おり、風の具合で潮の香りがむっと強くなる。海面に浅く包丁を入れたような波が、ざわめきながら生まれては消える。左手には、岬みさきのこんもりとした丘が見えた。余市川河口の向こうにある丘は、濃緑色の森こみどりいろに覆われている。

かつしよく 褐色の砂浜には初夏の風が吹いていた。辺りには誰もいない。さつきまで物欲しそうな顔をした野良猫がうろついていたけれど、いつの間にやらどこかへ去ってしまった。食べ物にありつけそうな、港のほうにでも行ったのだろう。

浜辺の適当な岩に腰かけ、海を眺めているあいだ、わたしは人であることから離れられる。家族も、同級生も、教師も、近所の顔見知りもない。一人きりでわたしは、川崎愛かわさきあいかという重い衣を脱ぎ捨て、ただここにいる。束の間であっても、己の運命の短さすら忘れることができる。

たっぷり一時間ほど、浜辺にいただろうか。わたしは岩から降り、尻をはたいて家に向かった。砂浜に残る足跡が、下駄むらざうりや藁草履わらぞうりではなく、ゴムでつくった千日履せんいちばきであることが誇らしかった。千日履せんいちばきはこの春、母が金光教こんこうけうの知り合いからもらってきたもので、やわ

らかい履き心地が気に入っている。

ぺたぺたと足音を鳴らしながら、家路をたどる。海と家とのあいだには、防風林のほか漁師たちの小屋がぽつりぽつりと建っている程度で、幼いころから迷いようがなかった。

余市の町で、わたしたちが住むあたりは会津長屋あいづながやと呼ばれていた。会津からの入植者が多いとかで、そう呼ばれている。建ち並ぶのは似たりよつたりのあばら家で、もちろん、わが川崎家も例外ではなかった。

「ただいま帰りました」

木戸を開け、土間に一步踏み入ったところで、わたしは動けなくなった。

開け放した襖の向こうで、伊藤さんがあぐらをかいていた。十歳の妹が、同じ部屋でつまらなそうに文芸雑誌を読んでいる。母は不在だった。

「おかえり」

伊藤さんの優しい顔に、笑みが浮かんだ。眼鏡の奥の両目が細められ、目尻しじに皺しわができる。常に向かい風を浴びているかのように、前髪は逆立っていた。以前、この髪の癖は生まれつきで、持ち主にも手の施ほどこしようがない、と苦笑していた。

顔が熱くなっていないか確かめるため、とつさに頬に触れた。幸

い、海風を浴びていたおかげか肌は温い。

「伊藤さん、どうしてうちに？」

「ぼくが来ちゃいけない理由があるかい？」

そう言われると、なにも返せなかった。土間で困っていると、伊藤さんが「ちかちゃんに用事があってね」と言う。途端に、空気を吹き込まれたみたいに胸がふくらんだ。このわたしのために、わざわざ家へ？

伊藤さんは、座卓の上の封筒を手を取った。表には〈川崎愛様〉と記されていた。

「昇のぼるからの便りに入っていた」

「……ありがとうございます」

顔には落胆の色が表れていただろうが、なあんだ、と口にしながらただけまだ堪こらえたほうだ。結局、兄だ。伊藤さんが十六歳の小娘にわざわざ声をかけてくれるのは、わたしが川崎昇の妹だからだ。そんなことはわかりきっているのに、それでもなお期待せずにはいられない。

畳が上がって、伊藤さんの斜め向かいに腰を下ろした。封筒を受け取り、いったん傍らに置いておく。

「開けないの？」

「後で読みます。伊藤さんへの便りには、なんて？」

「いろいろとね。いま、新しい詩誌について相談しているところなんだよ」

その話は前にも聞いたことがあった。伊藤さんは、去年から〈椎の木〉という同人に参加している。そっちは東京の百田ももたという人が主宰しているらしく、自分は自分でやりたいことがあるんだ、と話していた。

「できたら、必ず読ませてくださいね」

「もちろん。ちかちゃん、ぼくらのいちばんの愛読者だから」

そのひと言は、今度こそわたしの顔を熱くした。同時に、ぼくらと
いう言い方に、強く突き放された。

伊藤さんは、わたしを対等には見ていない。あくまで自分と川崎昇、二人きりの世界の外にいる傍観者ぼうかんしゃとして、存在を認めているだけだ。そこで見てもいいよ。でもここには入ってこないで。伊藤さんの穏やかな笑顔を見ると、そんなつぶやきが聞こえてきそうだった。

「イチゴはもう、食べごろかな？」

「うちの、ですか？」

伊藤さんが言っているのは、母が営む小さな果樹園のイチゴだろう。登のぼりという地区にある果樹園は、家から小一時間の場所にある。そこで採れるイチゴは、わたしの好物だった。いまは五月下旬。まさ

に匂に差ししかかっていた。

「そろそろだと思えますけど」

「次の休み、一緒に行こうよ」

えっ、とひとりで声が出た。妹がしらけた顔で振り返る。

「いいんですか。二人で？」

「特別なことでもないだろう。あそこには、昇とも何度も行っているんだし」

また昇か。だが、うんざりしたのはほんの一瞬だった。

「ちょうどイチゴが食べたいと思っていました」

わたしの声音は、自分でもわかるくらいに跳ねていた。

「ならよかった」

伊藤さんは笑った。六歳上の伊藤さんは、男の子とは違う笑い方をする。彼の内心は声には出ない。目や口に生じる皺、かしげる首の角度、漏れる吐息。わたしはそうした手がかりから、伊藤さんの心のうちを推し量るのが好きだった。

その笑顔は、どんな植物の実よりも酸っぱかった。

緑色の炎が、列車の窓を流れていく。

赤い斑点の混ざったイタドリが、しきりに車体を叩く。とげとげしいカラマツの葉が、乗客たちをおびやかす。こんもりとした葉叢はむら

の奥から、鳥たちが目を光らせている。朝の車内は植物たちが発する生命の息吹に侵食されていた。

座りなれた長椅子の上で、わたしは窓から目をそらしてやり過ごす。夏が訪れるたび、この通学列車は緑色の炎で燃やし尽くされる。

目の弱いわたしは、その鮮やかさに毎年のように網膜を焼かれ、眼科に通っていた。長い冬後にやってくる芽吹きの季節は、多くの人にとって心うるおうものらしいが、わたしにとっては違う。野放図に荒れ狂う緑は、両目を射るおそろべき怪物だった。

車内はセーラー服の少女や学生服の少年で一杯だった。小樽行きのこの通学列車は、兄が学生のときにはもうあったという。一年生と思しき十二、三歳の子たちがききやいはいはしゃいでいたけど、わたしにとって汽車は自室同然だった。なにしろ五年目だ。この春に高女を卒業し、補習科に通っているわたしは車内では「大年増」の部類に入る。

「ねえ、ちかちゃん」

向かいに座る律ちゃんが、鈴のような声で言った。

「なに？」

「『雪明りの路』、読んだ？」

「当たり前じゃない。読んでないの？」

つい、すっとんきような声が出た。

伊藤さんが、初の詩集『雪明りの路』を刊行したのは昨年十二月だった。本が出たと聞いた時から読みたい読みたいと思っていただけ、伊藤さんの初の著作という記念的な作品だけあって、正面からねだるのはかえってはばかられた。兄のもとには絶対届いているはずだけど、東京にいる兄に読ませてもらうのは不可能だ。

年明け、わたしは車内で偶然にも伊藤さんに遭遇そごくぐうした。中学の英語教師である伊藤さんは、通勤によくこの列車を使っている。塩谷しおやから乗ってきた伊藤さんを見かけた直後、一緒に通学していた律ちゃんに耳打ちして、作戦を立てた。

がたがたと揺れる車内で、わたしは手すりをつたいながら伊藤さんに接近した。おはよう、と挨拶あいさつする伊藤さんに、できるだけ甘えた声を出す。

——あのう。律ちゃんが、『雪明りの路』をどうしても読みたいって言っていて……だから、送ってくださるとすごく喜ぶと思うんです。よければ、わたしにも。

律ちゃんのお姉さんがかつて伊藤さんと付き合っていたことは、わたしたちのあいだでは周知の事実だった。それもあって、律ちゃんの名前を出せばお願いが通じるんじゃないかという悪知恵が働いた。

後日、伊藤さんは署名入りの『雪明りの路』を、わたしと律ちゃん

にくれた。それが二月のこと。

「もらってから四か月は経つよ」

「違うの、わたしも読んだよ」と律ちゃんは弁明した。

「ただ、ちかちゃんとまだ話していないから。どうだったかなと思つて。ちかちゃんは、どれがいちばん気に入った？」

うーん、と腕組みをして考えこんでしまった。むずかしい問いだった。『雪明りの路』には、自然や恋情を詠った百以上の作品が収められている。そのなかから一等賞を決めるといふ試みが、どだい無茶に思えた。

余市に住んでいる律ちゃんとは、物心ついたところからの仲良しだ。おおらかで楽しくて大好きだけど、ときどきこういう雑なことを言う。しかたなく、最初に思いついた詩を答えることにした。

「〈暗い夏〉かな」

——夏の草木は 自分の悩ましい緑に苦しんでゐる。

その一文からはじまる〈暗い夏〉は、暗唱できるくらい読み返した。生き生きとした夏の自然を詠っているのに、なぜか読み手は追い詰められていく。まるで、この通学列車からの風景を詠んでいるようだった。

「律ちゃんは？」

「〈私は甲虫〉」

準備していたのか、返答は早かった。

「へえ」と応じたけれど、正直に言って、わたしには凡庸ほんような詩に思えた。〈女〉という存在を前に、自分の内側に閉じこもってしまう詩で、〈ああ私を甲虫のやうにこはばらせてゐる〉という締めくくりも陳腐ぶに思えた。でも、それはわたしに文学を読む能力が不足しているせいなんだろう。詩のよさがわからないことを律ちゃんに悟られないうよう、「わたしもいいと思う」と答えた。

伊藤さんから漏れ聞くところでは、『雪明りの路』は新聞などで紹介され、そのたびに読者を増やしているらしい。たまに読者からの手紙が届くんだ、と嬉しそうに語っていた。読者ってどんな人ですか、とは訊けなかった。若い女性だったら落ちこんでしまいそうだから。

「ちかちゃんは、詩は書かないの？」

「うん。書けないから」

「うそ。こんなに読んでいるのに。それに、本間先生ほんまが教えてくださいませんか」

担任の本間先生は、歌人だ。詩歌のつくりかたを熱心に教えてくれる人で、わたしも何度か先生の指導を受けたことがある。

「でも、才能がないよ。伊藤さんとは違う」

「書いてみないとわからない。ちかちゃんの詩、読んでみたいな」

列車は山間やまあいを抜け、小樽に近づいてきた。いつしか緑の炎は消え、代わって田畑や民家が窓の外に見えていた。

車輪が鉄路を擦する音が、絶え間なく響いている。その騒音にかき消されるよう、わざと小さい声で、「書けないってば」とつぶやいた。

携帯ランプには、一匹の羽虫が集まっていた。

光の下で開いているのは、兄と伊藤さんがつくった同人誌だった。詩集や雑誌を読むのは夜の日課だ。この雑誌を読むのも、もう何度目だろう。紙が擦れて、ところどころインクが消えそうになっていた。

家のいちばん奥にある小さな板間が、わたしの個室だった。かつては兄がつかっていた部屋で、上京を機に譲ってもらった。布団を敷いて座卓こうりと行李を置いたら余白がなくなるくらい狭いけれど、それでも専用の空間はうれしかった。たまに床板から虫が這い出てくるし、隙間が多くて風が冷たいけれど。

浴衣はんでんに半纏を羽織り、紙の上の文字に目を通す。初夏になっても、余市はまだまだ冷える。遠くから、波と波のぶつかり合う低い音が聞こえた。

余市湾から近いわたしの家では、時化しげの日には波音が聞こえてくる。びょうびょうと吹く風と低い海鳴りを聞きながら眠りに落ちた

夜は、数えきれない。妹が幼いころは、獣けもののうなりのような海鳴りを怖がって、よく泣いていたものだ。かく言うわたしも、布団の端を噛んで恐怖をこらえた記憶がある。

さすがにもう、海鳴りを聞いて涙をこぼしたりはしない。高波はただの高波に過ぎず、獣の咆哮ほうこうでもなんでもないことを知っている。だが胸の底を焦がすような恐れは、いまだにあった。路傍ろぼうに立つわたしが、波にさらわれ、海へと引きずりこまれる姿を想像する。そんなことはあり得ない、と理性が告げている。それでも想像を止められない。

書かないと。頭の芯から、誰かに命じられた気がした。

ぺしゃんこの座布団から立ち上がり、行李の底にしまいこんでいる雑記帳を引っ張り出した。ここに保管してあることは、誰にも告げていない。雑誌を押しつけて、代わりに雑記帳を広げる。お気に入りのペンを選び、インクを浸して、頭のなかに浮かんだ想像を文字に起こしていく。幼いころから、筆よりもペンのほうが好みだ。指先に伝わるかちりとした触感がいい。

この文章を、詩と呼んでいいのかはわからない。ただ、文章を書くことは常にわたしの傍らにあった。

ほんべつ本別の叔母の家に預けられていたのは、六歳から十二歳までだった。詳しくは知らないけれど、同じ時期、川崎の家が没落したことと

無関係ではないらしい。金銭的な事情が背景にあることは幼いながらにわかっていてから、できるだけ叔母には迷惑をかけないように心がけた。そこを追い出されたら、もう行く場所がないから。

本心を見せられない日々でも、文章を書いているときだけは素直でいられた。誰にも見せない帳面に、畑で出くわした風景や教室での出来事を書きつけた。気を遣う必要も、恰好をつける必要もなかった。ひとりで文字を書いているあいだだけは、本当の自分であることができた。いつ、なにがきっかけではじめたのかは記憶にない。気がつけば、わたしは筆を動かしていた。

文章を書くときは、誰にも見られないように書く。それは本別にしたところからの決まりだった。

冷ややかな寂しさと、灰色の海。わたしは心のうちに浮かんだものを、言葉にして書きつける。完成したのは抒情詩とはほど遠い文章だった。生乾きで、とがっていて、とても直視できない。わたしが書く言葉は固く冷たいまま、紙の上に横たわっている。同人誌に掲載されている詩のような、潤うるおいや温度が感じられない。

詩らしきものを書いていることは、家族にも律ちゃんにも言っていないかった。とても、詩と呼べるような代物ではないからだ。わたしが書く文章は、伊藤さんや兄がつくる詩とは似ても似つかない。劣っているというより、そもそも文章として質が違う、という感じだ

った。

文学をやりたい、という気持ちはずっとある。書くことをよすがに生きてきたわたしにとって、それはごく自然な選択だからだ。ただ、まともな詩ひとつ書けない女が、文学を志望することの愚かさもわかっていた。顔の見えない大人たちに嘲笑ちやうしやくされるのを想像するだけで、吐き気がこみあげた。

紙の上のインクが乾くのを待って、再度、文章を読み返した。二度読んで、はつきりと落胆した。

やっぱり、わたしに詩は書けない。

伊藤さんや兄つとが綴るのは、もつと湿っぽくて、温もりがあって、包みこむような詩だ。それこそが抒情詩であって、文学なのだ。わたしが書いたできそこないの文章を、誰かに見せる勇氣はなかった。非文学の烙印らくいんを押され、心に傷を負うだけだ。

わたしには詩の才がない。

渾身こんしんの力でペンを握りしめた。それでも、ペンを折ることはできなかった。

縦縞たてじまの銘仙めいせんは、最近のお気に入りだった。

赤紫と白の縞模様は大人っぽい印象で、高女に入りたての幼い子たちには着こなせない代物だろう。襟や袖の裏地が明るい黄緑なの

も、はっとさせられるようで良い。本当は千日履きを合わせたかったけど、足を痛めそうで、普通の下駄にした。

洋装も持っていないわけではないけれど、わたしには和装のほうが合う。母や叔母からは、あなたは着物が似合う顔だから、と言われて育った。

家の前で待っていると、やがて、小屋と小屋のあいだに人影が現れた。親指の爪くらいの大きさでも、遠い人影が伊藤さんであることはすぐにわかった。白いシャツにサスペンダーという出で立ちは、傾いた家ばかりの会津長屋では輝いて見える。足元にはズック靴を履いていた。

「お待ちせ」

伊藤さんは、はにかむように微笑した。これからしばらくこの笑顔を独り占めできる。心臓が高鳴り、胸の内側でどこ太鼓を打ち鳴らされる気がした。

わたしたちは長屋を発ち、果樹園へ向かった。幸い、空はよく晴れていた。家々と電柱が建ちならぶ道を横並びで歩く。ぼったり知り合いに会いはしないか、とひとりで勝手に気を揉んでいた。

「その着物、ぼくの前で着たことがあったっけ？」

伊藤さんが、こちらをちらと見ながら言った。

「初めてだと思います」

「そうか。似合ってるね」

そのひとで、顔が燃えた。横を見ることができなくなり、ただ前だけを見ずんずん歩いた。電柱にぶつかりそうになったが、「危ないよ」と伊藤さんが声をかけてくれたおかげでなんとか避けた。

果樹園に着いたあたりで、ようやく動悸どうきがおさまってきた。青々と葉を茂らせたリンゴの木が、整然と並んでいる。

この果樹園は、川崎家にとっては重要な収入源だった。父のいなわが家では、果樹園の主である母が主な稼ぎ手である。昔はずいぶんお金を持っていたけど、わたしが五、六歳のころに株で失敗して没落してしまったらしい。たくさん持っていた土地も手放すことになり、いまでは果樹園の他にいくつかの土地を持つただけだった。

決して広いとはいえない園内で、いちばん面積を取っているのがリンゴだ。いまでこそ葉っぱしか生えていないが、半年もしないうちにつやつやとした実がなる。ただし、余市の果樹農家でリンゴを育てていない家はないため、うちで採れる量は市全体で見ればごくごく小さな割合でしかない。

「イチゴはどこだっけ？」

「あちらです」

先に立って歩き、伊藤さんを案内する。規則的に植えられたリンゴの木影が、わたしたちに覆いかぶさる。羽虫が目の前を通り過ぎ

る。

イチゴの畝は、果樹園の隅にふた筋だけあった。売り物というより、家族や親戚、知り合いが楽しむためにつくっている。毎年、ここに律ちゃんたちを呼んでちよつとしたピクニックをするのが楽しみだった。

伊藤さんは畝の傍らにしゃがみこんで、色の抜けたイチゴをつまんだ。

「まだ少し早いかな」

「こちらの実は、熟れていますよ」

立ち上がった伊藤さんは、「どれどれ」とわたしの手元を覗きこむ。伊藤さんの顔がすぐ横にあった。身じろぎすれば、頬と頬が触れそうだ。これが町中ならば距離を取ったかもしれないが、果樹園ならば人目を気にする必要はない。わたしは鼻から息を吸いこみ、思う存分、伊藤さんの気配を感じた。

それから、ふたりでさんざんイチゴを食べた。未熟な実も多かったけれど、今年はまだ誰も収穫していなかったらしく、すべての実が手つかずだった。虫や鳥に食われていない実を選び分け、汚れを落として口のなかに放りこむと、じわりと甘酸っぱさが広がる。舌に残る酸味はしつとりと尾を引き、もうひと粒、と手が伸びる。この時期にだけ味わえる、格別のごちそうだった。

伊藤さんは、「これどうぞ」と時おり採った実を分けてくれた。よく食べる女だと思われるのは恥ずかしかったけど、イチゴの魅力が勝り、もらった実は全部食べてしまった。伊藤さんは黙々と、実をつまんでほこりを落として口に運んでいた。

お腹がくちくなくなってきたころ、伊藤さんが下草の生えているあたりにしゃがみこんだ。

「休もう。少し食べすぎた」

伊藤さんは、乾いた雑草の上に無造作に尻を落とした。少しだけ迷ってから、その隣に腰をおろす。ふと顔を見ると、伊藤さんもこちらを向いたところだった。その顔にからかいの色がよぎる。

「ちかちゃん、口」

「えっ？」

わたしが口元に手を伸ばすより早く、伊藤さんの太い親指がわたしの唇の下をぬぐった。濡れていた口のなかが一瞬で渴く。伊藤さんの白っぽい親指の腹に、赤い果肉がついていた。果肉に付着している液体が、果汁なのか、唾液なのかはわからない。

「赤かったよ」

あつ、と応じるのが精一杯だった。顔を伏せ、肌もすりむけよとばかりに手ぬぐいで口元を拭いた。伊藤さんは気にするそぶりもなく、涼しい顔で果樹園に吹きわたる風を浴びていた。

わかっている。伊藤さんにはその気なんてかけられない。だからこそ、こんな大胆な真似ができる。

伊藤さんの澄んだ目は、整列するリンゴの木々にそそがれていた。川崎家の園で育てているのは、ひのころも緋之衣という品種だった。黒みがかった紅色の果実はしまっていて、爽やかな甘みがある。毎年、伊藤さんは必ずと言っていいほど、ここに来てリンゴを食べる。

昨年もそうだった。秋に入り、余市に帰省した兄と連れ立って、果樹園へ足を運んだことをわたしは知っている。本当はついでに行きたかった。でも、伊藤さんと兄の友情に割って入る隙などないことは、よく知っている。

「今年度で、教師を辞めようと思っているんだ」
唐突に、伊藤さんは独白した。その横顔に愉快そうな笑みはなかった。

「……辞める？」

「東京に、昇のところに行く」

ああ、やっぱり。

兄が上京したのは三年前の十月。むしろ、ここまでよく我慢した、と言ったほうがいいかもしれない。伊藤さんは小樽高商の学生だった時分から、文学の上では兄と一心同体だった。同じ同人で活動し、暇さえあれば顔を合わせ、詩論を戦わせていた。雑誌をつくるお金

「を稼ぐため、ふたりで石鹼せっけんを売りさばっていた。そんなふたりが、わたしは一生見ていたくらい好きだった。

「決めたんですね」

自然と、わたしの声はぶっきらぼうになっていた。東京へ行けば、伊藤さんとは会えなくなる。駅舎や列車で遭遇することも、果樹園を案内することもできない。想像するだけで、黒く重い雲がのしかかるようだった。

「お仕事は、どうなさるんですか」

失礼ながら、文筆だけですぐに食べていけるとは思えなかった。

兄は東京の貯金局で働いているが、同じように仕事を持つつもりだろうか。伊藤さんは「問題ないよ」と屈託くつたくのない調子で言った。

「貯金ならあるんだ。大した額じゃないけど、東京でそれなりにやっていけるくらいは貯めてある。いざとなれば、学校の講師でもなんでもやって食いつなげばいい」

「文学なら、小樽でもどこでもできるじゃありませんか」

「駄目だ。昇のぼと約束したから」

鈍なで薪まきを割るような、きつぱりとした口調だった。

わたしは異父兄、川崎昇の顔を思い浮かべる。坊主頭に鉄縁の眼鏡。垂れた目や厚い唇は、わたしとちつとも似ていない。たしかに、面倒見がよくて親切な人だとは思う。妹として誇らしい兄ではある。

けれど、あの人のどこに、そこまで強く伊藤さんを引き付けるものがあるのかよくわからなかった。

伊藤さんは言いふくめるように「ちかちゃん」と呼んだ。

「ぼくを詩人として最初に認めてくれたのは、昇なんだよ。昇がいなければ、ぼくは詩人でいられない」

まるで、わたしの内心の問いに答えるかのようだった。

わざわざイチゴ採りに誘ってくれたわけが、ようやくわかった。

これは、伊藤さんなりの思い出づくりだったのだ。来年の初夏にはもう、伊藤さんはここにいない。親友の妹が自分を慕っていることを知っていて、あえて、最後に素敵な記憶を準備してくれたのだ。

そんなのいらぬ。ほしいのは、伊藤さんがいる日々だった。毎日でもなくてもいい。たまに顔を合わせて、ちかちゃん、と呼んでくれれば。それだけで、わたしの日常はすみずみまでうるおうのに。

「帰ります」

考えるより先に、立っていた。ぼかんとした伊藤さんを置いて、さっさと離れる。下駄の歯がぬかるみにはまったが、力づくで引き抜いた。縦縞の裾に泥が飛ぶのも構わず、大股でずんずんと進む。

呼び止める声はなかった。一度も振り返らず、わたしは果樹園を後にした。

兄と伊藤さんの交流がいつからはじまったのか、正確なことは知らない。ただ、わたしが伊藤さんと知り合ったのは四年前、高女こうじょに入ってすぐの春だから、少なくともそれ以前には面識があったはずだ。当時、兄はまだ小樽の貯金局で働いていた。わたしはたまにだが、兄と一緒に通学列車に乗ることがあった。とりわけ最初の春は、「お前はまだ慣れていないだろうから」と、わざわざ出勤の時間を合わせて小樽まで送ってくれた。兄はそういう人だ。高女を受けるための勉強をしているときも、お茶を持ってきてくれたり、ストーブの具合を調整してくれたりした。お礼を言うと、いやあ、と照れて坊主頭を撫でるのが癖だった。

ある朝、塩谷の駅で薄手のトンビコートを着た眼鏡の男性が乗ってきた。その人は立ったまま本を開いて読みはじめたが、じきに兄が「あっ」と小さい声をあげた。

「どうかした？」

「いや、知り合いがいた」

車中は少し混雑していたけれど、兄は構わず男性のほうへ近づいていく。所在ないわたしは、仕方なく兄についていった。トンビコートの横に立った兄は、「伊藤、伊藤」と呼びかけた。相手はびっくりして本から顔を上げた。

「昇さん」

「奇遇だね。これから学校かい？」

「ええ。昇さんも乗っていたんですか」

「いつもはもっと早いけど」

親しげな二人の会話を、わたしは緊張しながら聞いていた。伊藤と呼ばれた男の人が、きよとんとした目でわたしを見た。視線に氣付いた兄が「妹だよ」と言ったので、揺れる車内でがんばって頭を下げた。

「川崎愛ちかです」

伊藤さんは眼鏡の奥の目をまたたかせ、淡雪のように溶けそうな笑みを浮かべた。

「はじめまして。伊藤整ひとしです」

それから兄はべらべらと、わたしについて語り出した。兄にとつては七歳下の妹であること。この一月に本別から余市へ越してきて、一緒に暮らすようになったこと。小学校の成績が優秀だったこと。わたしは黙って、隣でじっとしているしかなかった。窓の外を、雪の消えた春の自然が流れていく。

ひと通り話を聞き終えた伊藤さんは、宙を見ながら「なるほど」と二、三度うなずいた。それから、すっとわたしに視線を移した。

「ちかちゃんは、芯のある女性だね」

えっ、と思わず口に出していた。ちかちゃん、と呼ばれたことに

も、芯のある女性だと言われたことにも面食らった。

「わたしが、ですか」

「そうだよ。余市の生活に慣れるだけでも大変だろうに、高女に行くための勉強までしていたんだろう。それで見事に合格するんだから、大したものだ」

途端に頭がぼうつとした。誰かにそんなことを言ってもらったのは、初めてだった。親戚のなかにはわたしが高女に行くのをよく思わない人もいて、母や兄がかばってくれなければ試験を受けることすらできなかった。でも伊藤さんは、わたしのがんばりを認めてくれた。うっかりすると泣いてしまいそうだった。

同時に頭のなかでは、まったく関係のないことを考えていた。芯のある女性、ってなんだろう？ 芯のある男性、という言い方はしないのに。まるで女性は芯がないのが当たり前、と言わんばかりだ。

褒められたのがうれしかったのか、兄は鼻息を荒くしていた。

「そうなんだよ、伊藤。ちかは努力家なんだ」

寂しさに耐えることを努力と呼ぶなら、まさしくわたしは努力家だった。本別の叔母はいい人で、食べるに困ったことはないし、和裁や農作業を教えてくれたりと、いろいろな面倒を見てくれた。ただ、そのふるまいの端々には、どうしてうちで世話しなきゃならないの、という本音が滲にじんでいた。わたしの手首を握る力の強さ。目が合っ

た瞬間の暗い目つき。いつまで経っても縫い直されることのないほつれ。そうした細かい諸々が、わたしの心をきつく締めつけた。

わたしの内心を知らない兄は、伊藤さんとの話に花を咲かせていた。

漏れ聞こえてくる「『青空』の方針では」とか「入稿に間に合わない」とかいった言葉から、雑誌に載せる作品について話し合っているのだと知れた。『青空』というのは、兄が仲間たちと発行している同人誌だった。

正直に言って、わたしには二人がちよつと不自然な取り合わせに思えた。兄は優しくて情に厚い、行動の人だ。一方の伊藤さんは、情よりも理が勝っているように見えた。文学という共通項があるにせよ、この二人では会話が噛み合わないのではないか。伊藤さんと会って間もないわたしは、勝手にそう思っていた。

「次の号には、必ず伊藤の詩を載せたいんだよ」

熱っぽい言葉を吐く兄に、伊藤さんはうつむいて「どうでしょう」

と応じた。

「ぼくの詩は、まだ詩の体裁になっていないから」

「なにを言ってるんだ？」

「ぼくよりも才能がある詩人は、ごまんといえるでしょう。そういう人を優先してやったほうが、『青空』のためにもいいんじゃないです

か」

兄の眉が吊り上がった。身構えたわたしの予想に反して、兄の声は穏やかだった。

「伊藤には詩の才能がある。ぼくが保証する。きみはなんの心配もなく、作品をつくってくればいい」

トンビコートの裾が、ひらひらと揺れた。

そういうことか、と腑^ふに落ちた。性質が違うから、この二人は友人同士になったのだ。

その後も何度か、車中で遭遇した。いつからか、伊藤さんは兄を「昇^{せい}」と呼ぶようになり、兄は伊藤さんを「整^{せい}」と呼ぶようになった。わたしも本当は「整^{せい}さん」と呼びたかったけど、どうしても踏み切れず「伊藤さん」と呼び続けた。

〈つづく〉